

騎ギルとして召喚され
たオリ主くん

影後

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ライダーギルガメツシュ（オリ主）の巡る物語。

特異点は全部巡りません、カルデアに召喚されるのは当分先です。

目次

ライダーギルガメツシュ	1
ローマでも僕は僕の好きなようにやる	17
ローマとか圧制者よとか、五月蠅いなあ	30
………決めた滅ぼそう	30
バーサーカーは聞いてないし、直ぐに問題ありすぎ………でもない	39

ライダーギルガメッシュ

俺、いや僕はギルガメッシュというキャラクターが好きだ。傲慢さの中にあるカリスマ性、prototypeやstay night、Grand Order。

どんなギルガメッシュも、だけど……

「問おう。君が……我を呼んだのか」

「はい、英雄王よ。私は貴方に忠誠を」

目の前には遠坂時臣に似た誰か、Fateの何処の世界線なのだろうか。

僕は、ライダーだった。キャスターやアーチャーじゃない、ライダーだ。

宝具はヴィマーナを召喚するんだけど……

僕のヴィマーナはかなり物騒だ。

このヴィマーナいや機動戦艦ヴィマーナと呼ぼう。コレは、あり得ない。

ミサイルとレーザ砲を搭載している。

正直、僕だけユニヴァースから来たのかとも思ったが、あっちのギルは……うん。変

わらないし、

それに鏡を見たけど僕はギルよりも子ギルを大人にし、20歳位の青年にした感じ

だ。

そして、聖杯戦争が始まって2日目。

《世界が壊れた》

冬木の街が燃え盛り、聖杯戦争どころではなくなった。その中で何を血迷ったのかセイバーが聖杯戦争を再開したんだ。

確信した、ここはGrand Order時空だ。

アーチャーはセイバーの陣営にいち早く下り、

残ったのは僕とキャスター。

僕と戦う時だけキャスターはフード付けてたけど、そうだよ。あの声はクー・フリーリ
ンだ。

そこで気付けば……いや、僕の知らない亜種聖杯戦争だったかもしれない。

サーヴァントでストーリーを決めるのは早慶だ。

「……せめて、僕が痛くないのが良いな」

「うそ、クーさん以外に残ったサーヴァントが？」

「まあな、だが奴が協力してくれるかわからん」

「しかし、今は戦力が足りません。向うだけ進んで見ないものには」

「そうです、行きましょう！」

そんな会話が あったのか、それとも。

僕の家いや拠点は遠坂邸を改造したものだ。

陣地形成のスキルがなくとも僕はこの身体に存在する知識から並のサーヴァントに
対する結界なら作れるし、結界内を僕の世界にすることもできる。兎に角、僕の邪魔は
させない。

「おい！出てこい引きこもり！」

「引きこもりだ？巫山戯るな！キャスターの癖に活発なお前がおかしいんだぞ！」

だが僕を引き籠もりだと！そんな事はない！僕は引き籠もりじゃない！

「へっ、出てきやがったな」

「うそ……」

「煽られてだなんて」

「えつと……こんなにちわ」

「もう……」

何処となくムカムカしてきたから王の財宝を奴等の首前にだして槍達を首筋に当ててやる。

「何時でも殺せるんだぞ？ 理解してるよな。おい」

「んなの判って連れてきてるに決まってんだろ。なあ、金ピカ。いや……英雄王」

僕は取り敢えず家にクー・フリーン達を上げた。

「ランサーとアサシンを仕留めた事は褒めよう。いくらクー・フリーンが居るとはいえ良くやった……と言えるだろうな」

僕は遠坂邸に隠したヴィマーナの玉座にてカルデアの者達を見ていた。きちんとしゃがむ当たり分別は

「ねえギル！ これ何！」

「！ まって！ それ触ったら」

リツカがコンソールを弄った瞬間ヴィマーナが浮上を開始して僕は玉座から転げ落ちた。

「馬鹿！ あっ……あくあ……もう……」

遠坂邸は粉々になり、ヴィマーナは見えてしまっている。すぐに着陸してステルスとホログラムを展開した。

「……」

「えっと……」

「……」

「ギル……さん？」

「……」

「……（助けて！）」

（無理です）フルフル

（自分で巻いた種よ）

（うわ、俺の知ってる金ピカじゃねえな。やっぱり）

「ごめんなさい」

「……良いだろう、でももう勝手に触るなよ」

「はい」

僕はヴィマーナに完備されているアンドロイドに茶の用意をさせた。

「ウメエな」

「当たり前だよ、ウルクの品さ。そして……クー・フリーンだったね。聞かせて欲しい、君は僕を知ってる様子だね、何処かであつたかい？」

「あん？お前前に聖杯戦争で」

「僕はこの聖杯戦争が初参戦なんだよ。それなのに君とアーチャー、セイバーにランサーと来たらまるで僕を知っている様に動き回る。なんと宝具でこの土地ごと始末しようと思つたことか」

「てめえ、怖いな」

「あのねえ、僕は聖杯戦争に本来呼ばれないんだよ！まったく……面倒臭いこの上ない」
「おまえ、いや……たく」

「それで、僕の家に来たのはセイバーを殺して欲しいと？それとも冬木を更地にしてほしい？」

「考え方がこええよ！」

「…一緒に戦つて頂けませんか」

「うん、君はシールダーか。正直戦うのは吝かじゃない、だつてサーヴァントだからね。でも……なんで君達とやる必要がある？」

「え？」

「魔術師でもない、デミ・サーヴァントだけど真名も判らない。魔術師なのにサーヴァン

ト契約できないし、ヒステリックな女。まともな戦力はクー・フリーンだけだ。そんな状態で僕は君達という御荷物を負って戦えと？ 巫山戯るな」

「そんなの」

「おい、てめえ状況」

「クーさん…良いよ。英雄王、正直私は貴方の事は判りません。貴方のいた時代の人間でもないし、ギルガメツシュ叙事詩を見たこともない。でも、こんな絶望的な中でマシユは私を助けてくれたんです。だから、私も、私も彼女のマスターだって…自身を持つて言いたいんです！」

「ううん、マシユだけじゃない。助けてくれてるクーさんも、所長も皆」

その目は怖がりながらも、絶望はしていなかった。確かな希望を持って……

「……頑張ったね」

「え？」

「頑張ったって言ったんだ。クー・フリーン、君の気に入った理由もわかるよ」

「だろ？ テメエはあの金ピカじゃねえ。いい酒が飲めそうだけ」

「……名前は」

「藤丸立香です」

「僕は…サーヴァントライダー。ギルガメツシュ。問おう、汝が我のマスターか？」

それは契約だ、リツカが僕と契約をするかどうか。今、決まる。

「うん、私が……ギルのマスターだよ!」

その時、遠坂を失って途絶えていたバスが繋がった。

「取り敢えず、眠ると良いよ。君たち分の部屋はヴィマーナにある」

その日の夜、艦橋から周りを見ているとクー・フリーンが来た。

「なあ、金ピカ」

「その金ピカつてやめてよ。僕はギルガメッシュだ」

「わりいな、ギル」

「ああ、クー」

ウルクの酒とガラス杯を2つだして注ぐ。

「聞かせてほしい、君の出会ったギルガメッシュはどんなだった?」

「傲慢で、やけに慢心してたな。あと……」

聞かされたのは *stay night* のギルガメッシュだ。

「フツツ……僕と大違いだ」

そこで僕は決めた僕だけの、僕というギルガメッシュに対する設定を作ろうと。

「僕は……英雄王と呼ばれて正直嬉しくないね」

「ほお?」

「英雄なら、親友の一人も救えないんだ。親友の犠牲で勝つても、民の安全が手に入っても……僕は……親友と一緒に護りたかったんだ。僕は……」

「てめえ、まさか」

「うん、親友の蘇生が願いだよ。あの時死んでしまったエルキドウの蘇生。知ってるかい、歴史っていうのは過去が変わっても未来は残るんだ。変らない世界線と変化した世界線がね」

「あん？何だよそれ」

「つまり、君にわかる様に言えば……君は自分の息子を殺したろ？」

「ああ……嫌な思い出だぜ」

「だが、聖杯に願えば君の息子が生きている世界線ができるのさ。今の君は息子を失ったが、過去の君は失っていない。息子を失った君と失っていない君ができる。そこで、世界線という道は枝分かれする」

「もつと簡単に言えないのかよ」

「……川みために沢山枝分かれして未来は無限にある」

「最初から言えよ」

「くそっ……ホワイトボードで説明すれば良かった」

翌日、僕達は徒歩で大聖杯を目指していた。

「僕は聖杯が欲しい……待てよ。聖杯って僕の蔵になかったかな？」

「おい……てめえそれなら俺と話したあれは何だったんだ？」

「いや……待ってねうん、……駄目だ。今度目録でも作ろう。蔵の中身があり過ぎて判らない」

「みてください先輩！あれが英雄王の蔵ですよ！全て宝具です！」

「うん本当に仲間にできてよかったよ」

「……貴女達」

「熾天覆う七つの円環」

雑談をしていた彼等の前に矢が飛んできた。それは確実に此方を殺す一撃だ。

「けっ……てめえ相変わらずセイバーに奉公してやがんのかよ！」

「ふむ、私としては奉公しているつもりはないが……しかし……面倒なサーヴァントを連れているな」

「キャスターから聞いたが、君も僕と因縁が深い様だね。でも、残念だ。僕は君を知らないな」

「私もだ、貴様のような英雄王など」

「うん、だからね。死んでしまえ」

その時の言葉は酷く冷たかったと思う。アーチャーの周りに展開された王の財宝から宝具が放たれるけど、干将莫耶で弾かれてしまった。それどころか、撃ち返しだ。

「……さしずめ、贗作者と言った所かな。君は」

「慢心も傲慢も無いとは……だが、貴様を殺すことに躊躇いはない」

「そうかい、来なよ。贗作者。キャスター、リツカは速くしなよ。大丈夫、僕は負けないから」

「くっ…所々アレに似ている！行くぞ、英雄王、武器の貯蔵は十分か！」

「贗作者、君を殺す事など簡単だ！」

僕は蔵から二対の武器を出す。双剣にして弓にして、トンファー。終末剣エンキ。

「くっ…貴様の戦い方…ではないな」

「そうだね、神の鎖」

「くっ！」

神性のないアーチャーは干将莫耶で神の鎖を切り裂くが、すぐに僕のエンキが身体に迫る。

しかし、それを投影された剣で防がれ僕は胴体に蹴りを入れられた。

「足癖が悪いね…王に蹴りを入れるというのがどういう意味か…理解していないようだ」

「くっ…慢心の無い英雄王は」

「なら、あげるよ。王の財宝」

「I am the bone of my sword.」

“熾天覆う七つの円環”——！」

アーチャーが投影した熾天覆う七つの円環にだんだんと罅が入っていく。

「くっ…貴様は！」

「そうだよ、アーチャー。君が死ぬまで僕は蔵を閉じることはしない。さあ、宝が勿体無いしね、そう、勿体無い、勿体無い…だから、死になよ。さあ、目覚めるんだ。乖離剣エア」

「まさか…」

それはアーチャーであるギルガメッシュの宝具を放つ際に使われる剣。

しかし、彼はライダーであり宝具であってもアレは撃てない。

「エヌマ・エリシユは出来ないけどさ、ほら魔力を放つんでしょ。セイバーのアレは」

「くっ！」

そう、乖離剣エアをまるで約束された勝利の剣のように振るつたのだ。対界宝具を大軍宝具まで落とすが、それでもアーチャーは防げなかった。

四股は砕け、身体中から血が溢れ出る。

「まさか……このような」

「君が誰かは知らないさ、でもね。………王に不敬を働いたんだ。死んで詫びると良いよ」

「くっ…英雄王、貴様の本質はやはり変わらな」

アーチャーが言い終わるよりも先にギルガメッシュはその首を斬り落とした。

「さて………処分は済んだし」

「約束された勝利の剣」

それは僕を狙って放たれた。彼女達が負けたのかとも感じたが、どうやら違うようだ。

完全な不意打ちだった、守れはしたが傷は深い。

「やってくれる」

僕はヴィマーナにのり、大聖杯に向かった。

「流石に倒れんか、英雄王」

「…僕に傷を付けた挙げ句、左半分を使い物にならなくするなんてね。流石だと…言つてほしいのかい」

「先輩、所長、英雄王の魔力が増大しています！」

「不味いぜ嬢ちゃん達！」

「えーギル！」

「許さん、この我を傷つけた事。許しを請いながら消えていけ」

宝具展開

「まさか…固有結界だ?!」

「まじかよ、彼奴の宝具は」

「これが英雄王の宝具」

「あり得ない、これが英雄王」

「ギル？」

「ヴィマーナ、出航」

海原から黄金の戦艦が蘇る。僕を中心にクー・フリーン、立香、マシユ、所長がヴィマーナの管制に付く。

「全砲門開け、目標冬木市。ここら一帯を焦土にしてやれ！」

「はっ！」

「嘘！戦闘機?!」

「時代が違うわよ!!」

ヴィマーナからナン10機もの戦闘機達が出撃し、冬木の街を焦土としていく。それ

はアーサー王の居る大聖杯もだ。

「ヴィマーナ急速上昇」

ヴィマーナが変型する。人型の金色に光るロボットへと姿を変えると僕は叫んだ。

「ダイダロス・ブレイク」

ミサイル、キャノン砲、ビーム砲、ありとあらゆる攻撃をしながらヴィマーナの拳が大聖杯の位置に刺さり、まるで核弾頭を思わせる爆発が起こった。

「……ちっ、まさか残ってるなんて」

「貴様は、私の知る英雄王よりも残虐だな」

「アーサー王だっけ？ 教えてあげる、王はね残虐何だよ。王は選び、殺す。僕は彼女達力ルデアを選び、君達を殺す。それだけさ」

「英雄王、グランドオーダーは」

「知ったことじゃない」

「なに？」

「僕は僕の為に戦う。僕が戦うのに理由はいらない、だから、その五月蠅い口を慎め、雑魚」

僕は相当切れたんだと思う、何度も何度もアーサー王の身体をエンキとエアの二刀流で切り裂いていたもの。

「おい！止めろ！」

「……クー・フリーリン」

僕はクー・フリーリンを見た。そして、立香達カルデアを。

「クー・フリーリン、聖杯はあげるよ」

「おい！」

僕はエアを自分の喉に突き刺した。

ローマでも僕は僕の好きなようにやる

「なんの冗談だよ、コレは」

目の前にはまるでドラゴンを思わせる羽と尻尾が生えた少女。特異点Fで自害して座に戻れると思ったらこれだ。

「あつ！起きたのね金ピカ!!」

「君も僕を知っているのか？」

「え？月でのこと覚えてないの?!私の前で——したくせに！」

「まで！」

月の聖杯戦争?!エクステラか?うそだろ、僕がプレイしてない作品で何してんだよギルガメッシュユー!

「取り敢えず、僕は君の知る英雄王じゃない。クラスはライダーだ」

「へえ……金ピカの癖に礼儀正しいじゃない！」

僕は若干ムカツと来た。

「君、殺されたい？」

「い?!」

王の財宝で目の前の蜥蜴娘の周囲に宝具を出す。

不味いな、怒りを抑えないと。

「ごめんなさい!!ごめんなさい!!ごめんなさい!!!」

「まあ…許すそうか。さて、真名、教えてくれるよね?」

「(怒らせたら…:消される?)」エツ:エリザベート・バートリーです!ランサーです!

「よく言えた、それで聖杯戦争かな?僕達は殺し合う」

「話を聞いて!」

「良いだろう」

エリザベート、涙ながらにギルに説明中。

「人理修復ね、まさか英霊を抑止力にするとは」

「ええ…:ねえ、ギルガメッシュ様」

「…:ギルだ、僕の事はギルで良い。エリザ」

「へ?」

「色々と困らせてしまったからね、よろしくね。エリザ」

僕はエリザに対しての優しく微笑んだつもりなんだけど、何故かエリザは泣き出してしまった。

「うん、泣き止まないなら殺すよ」

「!」

「良くなりました」

(なっ…何なのよー!)

私の目の前にはあの金ピカの性格を数段良くして、残虐性を何十倍にもしたような美男子がいる。大人の私なら頬を赤らめて従ったかしら？

無理ね、ときおり見せる☒殺す☒というワードから本気の殺意を感じる。

コレ、本当にライダーなの?!

私、絶対かてないわよ!

小ブタ!子リス!助けなさいよ!

あの金ピカなんて目じゃないわよ!!

「それで、僕は君の事を知らない。だから、覚えている限り話してほしいな」

(…終わった)

私は私の来歴をすべて話した、第一特異点で起きた、大人の私との対峙も。すべて、話さなくちゃという気持ちに駆られる。

私以上のカリスマ、私以上の存在に。

「そうか、先ず、僕は君を否定しない。君は周囲による影響のせいで狂ってしまったのだから。寧ろ、君の場合社交界に出たりはしなかったのかな。いや、出ても無駄なのだろ

うね、君達の時代では貴族と平民は天と地だ」

「はい、ギルはどうなのですか」

私は私を肯定した目の前の王に問う。

「僕も考え方は同じだ、王はけして民に寄り添う事はない。だが、民を第一に考えている。だから、どんなに暴君でも許せる民が居るのさ。君にはそれが無い、ただ虐殺をし過ぎた。君が幽閉されて死んだのは貴族の娘を狙ったからさ。平民なら、関係無かつた」

「でも、アナタは違うでしょ！」

「当たり前前だ、永遠の美貌？そんなの元より持っている。この肉体がその証拠さ、でも肯定しよう。何故か、今を考えろ。君がソレを成したから英霊の座にゆき、新たな友を得たのだろう？それに、反英霊でも君が誰かを救った事に違いは無いのだよ。どんな汚名でも、ソレを誇りとするんだ。僕のように」

「え？英雄王が汚名？」

「英雄王、そうだね。友一人すら救えない存在が、英雄であり王だとするなら……それに祀り上げたのは民だ。何度、それを称賛と受けても僕には汚名であり、呪だ。何度、何度あの民達を殺してやろうと感じたか」

コレは僕の知らない器の記憶なのだろう、激しい憎しみが渦巻いている。

「それでも、僕はウルクが好きさ。だから……汚名も誇りにする」

「変わってるわね、金ピカ」

「それじゃあ、エリザ。憎い神の気配がするんだ。一緒に殺しに行こうか」

「は？」

とても良い笑顔で死刑宣告をするギル。

私は行動する仲間を間違えたわ。

「ちっ……なんで俺がお前と行かなきゃなんねえ」

「黙れランサー、キヤスターの貴様は静かにしているぞ」

（なんだ？俺達を見ている奴が）

「クー！キヤス兄！エミヤも早くいこう！」

「ゆくぞ！立香！余のドラテクをとくとその身に感じるが良い！」

ランサーの俺とアーチャーの野郎、んでマスターとマシユ。

俺はこの中でマシユについて最古参のサーヴァントだ。

マスターを追って特異点から来たバーサーカーも居るが、今はカルデアで待機中だ。

俺はあの野郎との歪み合いですら忘れてふつつつと感じる魔力に嫌な予感すら感じて

いる。

「ふむ、キャスター。何かあるのか」

「おい、弓兵。マスターの前にあの盾出しな」

「あの、キャスターさん。何が」

「来たぜ！」

「ちい…おい！キャスターの俺！この宝具つてあの野郎のか！」

「くつ…まさか私でも気付かんとは」

ランサーの俺、弓兵の野郎も気付かねえか。

だとすると、

「てめえか」

燃えた冬木で共に戦ったライダー。

おそろく彼奴の宝具だ。

「くーネロ陛下は私の後ろに!!」

「むっ…これだけの財宝、一体どれ程のものか！見てみたいぞ!!」

俺達が島に着くとそこは既に地獄だった。

「フフツ…フハハハ！フハハハフハハハハハ!! ああつ……実に！実に無様だね、でも…裏切るとはね、エリザ。いや、良い。僕は王だからね、一度の裏切りは許そう。そして、そのバーサーカー。お前は どうする、守るのか？」

「まさか……英雄王だなんて」

「……ふっ……詭弁だ……キャットはキャットだ。いくら……ボロボロでも……」

「ギル……落ち着きなさいよ、あんたあ……バーサーカーじゃないでしょうが！なに！狂化でもあるわけ?!」

「そうだね、生前何度も狂ってしまいたくて……それでも守り続けた、でも神は殺す」

目の前で虫の息のサーヴアントが3騎、うちのマスターが止めねえはずがなかった。

「エミヤ！クーさん！クー兄はギルを攻撃！一度ぶちのめして止めて！マシユは宝具準備！手当は私がするから！」

マスターの指示は的確だった、だがな、一つだけ駄目だ。

「まさか……ここでもう一度殺せるなんてね。贗作者」

「どうやら冬木での事を覚えているか……やり辛いこと、このうえんな！」

「ちっ！落ち着きやがれ、ギル！」

「やあ、キャスター。そしてもう一人はランサーの君か。面白い、このギルガメツシュに歯向かう愚行、教えてあげるよ」

「……私の知る英雄王よりも面倒な性格をしている」

「……はあ、だから僕は、慢心が嫌いなんだよ！」

「アンサズ！」

「ちい……よい攻撃だよ。キャスター、いやクー。流石、僕が友人と認めただけはある」
「なら、落ち着いて話しろ！」

「落ち着いてるさ、ただあり得ない程に狂いたくて、悪くて……スッキリしたい気分なんだよ！」

エンキをトンファーにしてクーに迫る。

彼は杖を使って僕の一撃をいなしてみせた。

「流石だよ、ああ……良いね。クー、君との闘いはまるで親友との一時だ。でも……残念だ、残念でならない」

「かあ……ランサーの俺！手伝え！」

「判った！」

「へえ、君がクーの本来のクラスか。キャスターで僕に迫るクーだ。ランサーなら、さぞ……」

「てめえは金ピカとは違うな、その姿勢……嫌いじゃないぜ!!」

ランサーのクーの槍が僕のエンキを吹き飛ばした。速い、これがランサー。ゲイ・ボルクを持ったクー・フリーリン。

「でも……僕の相手は務まらない、クー。君がキャスターだからこそ僕と戦えるのさ」

「ちい！眼中にないってか！マスター!!」

「クーさん！宝具開放!!」

「刺し穿つ死棘の槍（ゲイ・ボルク）」

「無駄だよ、熾天覆う七つの円環（ロー・アイアス）」

アイギスの盾すら僕の蔵にある、簡単なんだ。

でも、クー、君は僕に対して何度も抗ってきた。

「アンサズ！やれ！」

「悪い！ぶち抜けえええ!!!」

呪いの朱槍が迫る、熾天覆う七つの円環を破壊するほどのルーン魔術。

「クー、君はキャスターが本職じゃないと言ったが……君はキャスターも相応しいよ。

誰もが貶そうと、僕は……ギルガメッシュはそれを刻もう」

死んだと、霊基砕かれたと思った。

「……贗作者か、まさか最後に見るのが忌々しい君の顔とはね」

「……英雄王、貴様の歩んだ道は知らん。だが、貴様は休む事を、止まることを覚えろ。

私の言えた義理では無いがな」

「……そうか、エルキドゥ。君は僕を笑うてくれるかな」

英霊の座にも親友はいない。残ったのは鎖だけ。

「消えるとか赦さない！」

「マスター?」

「冬木でもそう!勝手に自害して、勝手に消えて!私は…私は最初にギルとクーを喚びたかった!ありがとうって言いたかったのに!だから…死ぬなんて赦さない!エミヤ、破戒すべき全ての符かして!」

「やれやれ、英霊使いの荒いマスターだ。英雄王、我がマスターに狙われたのだ。覚悟することだな」

瞼を閉じようとする僕の胸に破戒すべき全ての符が刺さる。確か、メデイアの一生涯が宝具となった物だったはずだ。僕の蔵にない物の一つだ、それが

「私はカルデアの…人類最後のマスター藤丸立香!人理の守護者よ、その責務をいま果たせ!」

「ぐっ……無理矢理契約……」

「令呪を持って命ずる!ギルガメッシュよ、その傷を癒やせ!」

僕の霊基が修復し、傷も癒える。

「……やってくれたね、リツカ」

「逃げるなんて赦さない!勝手に暴れて、謝りもしないで、自己満足で消えるなんて許さない!」

睡魔がなくなり、涙ぐむ少女の頭を撫でる。

「…………君がマスターなら、従うさ。さて、忌々しい女神とバーサーカーとエリザの治療をしようか。あと、贗作者」

「なんだ、英雄王」

「借は何時か返そう」

「…つくづく私の知る英雄王とは違うようだな」

「二人のクーには…………そうだな、後でウルクの酒でも飲もうか」

「まつ…………いいぜ、お前の酒は美味いからな」

「まじか…………良いねえ」

話し終えた後に考える、僕はここまで情緒不安定だったか？まるで精神汚染か、凶化を施されたかのようだ。

女神憎し、神憎し、恐らくそこら辺はアーチャーやキャスターのギルガメッシュよりも酷い。

ひと目見て、殺意しかない。

どうやら僕の…………其れ等に対して持ち合わせた容赦は直ぐに殺すか程度の物だ。

何とかソコだけは治そう、でも…………イシユタルにはできるか？

駄目だ、ヴィマーナの最大射撃してエンキかエアで首斬らないといけない様な嫌な気持ちになってくる。

「ギル？」

「なんだい、マスター。今僕は、女神をどう殺るか考えて」

「落ち着いて下さい！マスターはギルガメツシュ叙事詩も読みました。何故女神が憎いのかも理解して」

「……マシユ君、うん。そうだね」

僕が前に出ると案の定、女神ステンノの顔は恐怖に歪み絶望に沈んでいる。

「泣き叫び、赦しを乞えば生かしてあげるよ？」

言葉も出ない程なのだろう、気分が良い。

僕は造形が整った顔を見ながら顎に手を当てる。

「美しいな、僕ですら魅入られそうだ」

「えっ……」

「だからこそ憎たらしい、あの女に見えてしまう。ステンノ、どうせ貴様と我が共に歩む事などありえん」

「はわあ………先輩！ギルさんが！」

「……絶対に英雄王とは違うな」

「彼奴が女の口説き方を知ってるたまか？」

「うむ、しかし余も傷付けた後に接吻はせぬぞ？」

「さあな、ギルの野郎は口説くってかなんだ？」

「んっ……………」

「誓いだ、僕は君を傷つけず助けることを誓おう。ステンノ」

「わあ！わあ！！わあ！！こぶた！やばいわよ！」

「ちよつとエリちゃん静かにして！」

「御主人！キャットは人參を所望する！！」

たかが接吻の一つで騒ぐ事かよと感じてしまう。

動揺するのは女だけ、いやネロは違ったか。

「とっ…取り敢えず戦力GETです！！」

しかしこのステンノとの契約が別の女神とのパスとなるなんて俺は思いもしなかった。

ローマとか圧制者よとか、五月蠅いなあ………決めた滅ぼそう

「おお、圧制者よ！その体を」

「何？このバーサーカー。殺していい？」

「スパルタクス！落ち着いて！」

「ギルもだめええええ!!」

ローマでリツカ達と別れたのは良いものの、何故かこんなところに配属された。

圧制者とか何か騒ぐバーサーカーに、ブリテンの女王。

ローマ攻めろよ、お前等。

「んで、圧制者というがスパルタクス。僕は民を虐げた事など一度もない。僕の目をみろ、僕の目は圧制者の目か!!!」

「おお……その目いや、反乱の目！おお、圧制者よ。汝は反乱者であるか！ならば……叛乱だ！共に叛乱を」

「うぎい」

そう言いながら居たんだが、またしても僕を知っている敵に遭遇した。

「ムカつくな、だから決めたよ。君達は惨たらしく殺してあげる」

「うわあ……会いたくなかったなあ」

「コレは……冗談ではない」

「さて、跪いて赦しを乞えば惨たらしく、かつ苦しまずに殺すよ?」

「おい、ギル。お前キレてるか」

「ああ、味方には友人とその別クラスが居るのは良し。憎たらしい女神に馬鹿な皇帝、反逆者、そしてお前だよ贖作者」

「とことん私を目の敵にするな貴様は」

「まあ、それ以上に毎回僕の敵に僕を知るやつがいるという事。さて……ローマの諸君、見せてやろう。我がウルクの怒りを」

僕は宝具を展開した。

「ヴィーマーナ、抜錨」

空間を越えて黄金の飛行戦艦が出現する。

そして、ロボットや戦闘機が地面に爆撃を開始する。無条件に行われる殺戮、そして放たれるビームやミサイル。

「終わりだ、『ウルクの怒り』（ダイダロス・ブレイク）」

変形したヴィーマーナからミサイルビーム、そのすべてを当たりに振り撒きそして、黄

金の拳が地面を砕いた。

「さて、邪魔なサーヴァント達は殺したよ。どうした、エリザ、リツカ、マシユ？」

「ギル…アンタ手加減って」

「エリザ、教えてあげるよ。敵対者はね、どんなに惨たらしく殺しても僕は許されるのさ、人類最古の王なのだから、僕を邪魔できる物は居ないのだから」

「えつと…あの英雄王」

「ああ？」

「ヒイ！」「ごめんなさい！」

何故かエリザは怯え、マシユは盾で隠れてしまった。

「その傲慢さは英雄王だな、」

「性格は100倍良いぜ、あの野郎みたいに撃つだけの能無しじゃねえ」

「へえ…なあ、ギルガメッシュ。俺と一戦やろうぜ」

「ランサーのクー。良いね、さつきは不完全燃焼だった。次は本気でできるかもしれない」

エンキを構えているとリツカが令呪を構える。

「リツカ、理解してるの？令呪、あと2画なのに」

「そう、だから止めて。ギルは馬鹿な真似はしないでしょ」

信用されてはいるんだろう、僕もここで人類最後のマスターを殺したい訳じゃないんだ。

「わかったよ、ランサーのクー。殺し合いはまた今度だ。その時は…ヴィマーナじやなく僕としての技量で相手になろう」

「へえ…やっぱりだな、あの金ピカと似ても似つかねえ良い奴だぜ」

キャスターのクーといい、クー達は良い性格をしている。とても好ましいよ。

「さてだ…リツカ。どうする、目と鼻の先には敵の本丸。ここのサーヴァントとローマ軍なら一日足らずで陥落さ」

「……ギル、聞かせて。被害が出ない」

「そんな方法は無い、リツカ。君は優しいね。でも敢えて言うよ。君、サーヴァントを何だと思ってる？仲間、友人？マシユはきつとそうだろうね、まあ、サーヴァントを仲間と思うのは良いさ。でもね、所詮サーヴァントはサーヴァントさ。生きてない、だから死んでも気に病むな。そのの贖作者、カルデアと契約したサーヴァントはどうなる？」

『それは私が説明するよ、英雄王』

「…声はすれども姿は見えぬ。名前は？」

『レオナルド・ダ・ヴィンチ、ダ・ヴィンチちゃんと呼ん』

「巫山戯てるのは嫌いだな。……さっさと話せ、俗物」

「……………通信を通してまで感じるよ、君の魔力が。取り敢えず、カルデアで召喚されたサーヴァントは靈器を登録してある。特異点で倒れても此方で復活するよ。勿論、その後召喚も可能だ」

「良かったね、」

「でも、此方も無尽蔵に魔力リソースがあるわけじゃない。できれば倒れてほしくないね」

「そうか……………わかったよ。まあ……………」

「……………ギル？」

僕の周りに何かが浮かぶ、判らない。

何か、僕の身体を蝕んでいくような……………

「……………ゴブツ」

びちゃりと大量の血が溢れ、意識が朦朧としてくる。

「ギル!!」

「誰が……………僕に……………」

「駄目じゃないかギル、何時も話してるよね?殺されちゃうよ、怖い人達に」

サーヴァント達が僕を守るように展開する。

「てめえ……………何もんだ!」

「クセモノだよ」

「あつ……！ああ……………」

「ああ……………私の愛しいギルガメッシュ。駄目じゃないか、警戒しないなんて」

それは誰もが羨む程の美貌を持っている。

神に造られた存在であり、このあり得ないギルが家族として思っている存在。

「何で……………君が……………エル」

「……………だって、君を殺せるのは私だけだから」

背中から胴体に大穴が空いている、なのにエルはまだ僕の身体を貫いていく。

「あつ……………アア……………」

「ギル、お休みなさい。可哀想な王様」

「させない！応急手当！ギル！！何してるの！敵だよ！！」

「駄目だ…僕は」

「黙って！ギルは英雄王なんだよ！世界一、原初の英雄にして、英雄たちの王！それが

……………ここで倒れていいの?！」

その言葉は不敬だった。

憎たらしいほどの怒りと、それ以上に感謝が湧いてくる。

「……………そうだよ……………僕はうじうじしてられない。残虐にして、非道、そしてけして自身の

王道を見失ったことはない！それが……ギルガメッシュユダ」

「ギル!!クーさんは結界!マシユは宝具、エミヤは盾だして!クー兄は何時でも宝具撃てる用意!」

「……エル、僕は君を守れなかった」

「ギル………君はきつと聖杯に僕の蘇生を願うだろう。でも駄目だ、僕はいない」

「……消させない、僕は君を殺し、愛そう」

「……さあ………終わりだよ。」

「人であり、神である、私は君の歴史を記す鎖である『神の鎖』エルキドウ」

「世界の始まりを呼び起こす剣よ。今だけ僕に力を貸してくれ」

終末剣エンキ、全てを終わらせ、全てを始まりに返すもの。

「エルキドウ、覚悟!!」

宝具と宝具でも、まともな性能は出せない。

セイバーでもなければアーチャーでもない、

ヴィマーナはエルに撃ち落とされて終わりだろう。

「でも……英雄なら、その身一つで何とかしてみせる!」

「無理だね!君は……私を守ることすらできなかったろうに!!」

「……そうさ、全部守ってやるなんて馬鹿な考えだ。でも今だけ……今だけ力を貸せ!

守つてやりたいんだよ、せめてここに居る少女達は！未来ある子を……ここで殺させない!!」

「嘘だろ……ギルガメツシユが」

「いや……あれは本音だ」

「贗作者アアア!!!殺す!!!後で殺す!!!」

「何故私だけだ!」

「真名解放!!」

全てを無に帰す終末剣よ!!今ここで全てを飲み込め!!そして、新たなる始まりをここに記さん。我が名はギルガメツシユ、この名の下に世界に終焉と始まりを……射抜け

『終末剣』(エンキ)!!!」

数多の鎖と終焉の矢がぶつかる。濁流がうまれ、全てが飲み込まれる。

「終わりだ、君が君でない時点で……勝ち目など無いさ」

「……ああ……ギルガメツシユ。」

「サヨナラ……エルキドゥ」

そのまま消えていく彼女を見届け、彼女に向かい合う。

「……ごめんね、今回も最後まで付き合えないね」

「……ギル、令呪で」

バーサーカーは聞いてないし、直ぐに問題ありすぎ……でもない

「マスター！何故バーサーカーで呼んだアアア!!!何これ？俺こんな宝具知らない?!」

「！アステリオス!!」

「走るな！小娘!!」

アステリオスいや、ミノタウロスだな。

それがボロボロに……あれ？……すげえ見覚えある3人いる。

「……取り敢えず、王の財宝」

「なっ……この宝具は！」

「……聞いて良い？俺は今凄い泣きたいんだわ。まじでここ何処、勝手にそのエウリュアレに召喚されるし、マスターだし……」

「……ギル、どこにでも居るよね」

「何処にでも現れるのはギルガメッシュお兄ちゃんだからさ！」

「……………」

「マスター!!英雄王が普段と大違いです!!!」

「何があったの!!ギル!!」

その後カルデアと通信が繋がりましたとき。

「やあ!クー!!贗作者も元気そうだね!!」

僕はと言うと「ばーサーか」と書かれたTシャツを着ています。

「……あの、英雄王。何が」

「うん、多分狂化EXだね。女神とか神に対する憎しみとか無いし、贗作者とも酒盛りで
きるよ!」

「……つまり?バーサーカーで召喚されたからここまでフレンドリーな英雄王が生まれ
たと」

「うんうん……良いよ!盾娘ちゃん!」

「盾娘?!」

「……このギルも面白くて私は好きかな」

「よし!じゃあ、君の仲間を連れてくるんだ!!一緒に宴会だ!!ウルクの品と僕の料理、見
せてあげよう!」

僕は女海賊の一団と仲良くなった!

「ハツハツハツ!!僕のヴィマーナが一番だね!」

「ギルのヴィマーナは規格外だよ」

「くう……英雄王の船かい……見てみたいねえ」

「オツケー!! ヴイマーナ! 抜錨!!」

海を割って黄金の船が空へと浮かび上がる。

ウルクの守護者にして、僕の玉座。

機動戦艦ヴィマーナだ。

「よし! 主砲発射!! あれ? ……駄目だ、ヴィマーナ宝具じゃないから焼き討ちできない」
「それは止めてね!」

藤丸立香

「うーん……よし、立香! 僕は決めたよ、英雄王じゃなくて行商王もやろう!」

バーサーカーのギルは呆れるほどテンションが高かった。清姫すら驚くほどに。

「ほら、君達ってQPっていうのあるでしょ?」

「うん……まあ……」

「つてことで! この僕ギルガメッシュの蔵からQP次第で物資を出そうと思うんだ」

「……あの、英雄王? それは」

「アツハツハ! 古代ウルクの品さ!」

「……マスター様、この英雄王、私と同じ確かなバーサーカーです」

「なんで……なんで……こんなテンション高いのよ」

気付けばギルの服装も変わってた。

巫山戯てる様に見えるけど、至って真面目なんだろう。

☒宅配サービスAUO☒

皿◇◇◇◇◇○○○○まで

何処の時代でも、何処の時間でも間違いないくお届けします。

いわゆる痛Tだけど楽しそうだし、本人は真面目だし。

「じゃあ……ギル、何があるの?」

「いらっしやい、初回50%OFFキャンペーン開催中だぞー!」

野菜、果物、魚、肉、スーパーにあるような物から禁断の果実、黄金の果実、神話の怪物の肉やら何やらまで……それに宝具や礼装、服類もたくさんある。と自慢げに話してくれる。

「マスター!色々と買って送ってくれ!」

「エミヤ、うん……良いけど」

日用品から宝具まで揃えてる。

ギルいわく、日用品も僕にとつては宝だぞ?

とのこと、自然入荷するらしい。

宝具類は流石に一点物らしく、エミヤの投影する贋作ではないが本物に限りなく近い偽物とのこと。勿論、壊れない。

「おっ？ 良いね、オススメはこの槍だよ。ゲイボルクって言って因果逆転の魔槍」

「なんであんだよ！ ギル！ マスター!!! それ買ってくれえええ!!!」

「クーかい、うーんと………買います?」

「待てマスター！ 食材や日用品だ！ そちらを優先しろ！ 当たらない槍など買ったところで無意味だ！」

「んだと弓兵！」 「当たらねえ槍だと?！」

「ふっ………その槍で私の霊格すら穿けず」

エミヤとクー兄達が喧嘩を始めた。どうしよう

「あっ……先輩！ 此方の水着は!!」

「おっ！ 良いセンスだね、それは買ったらまず測定が入る。勿論、魔術による自動さ。どうだい？ 水中で無限に息ができる様になるよ」

「立香ちゃん！ それ買ってくれえええ!!!」

「ダ・ヴィンチちゃん?！」

「どんな魔術なんだ！ 気になる！ 気になるじゃないか!!!」

「えと……コレは」

「それは知り合いの『宮廷魔術師』から仕入れた☒マギマリ☒の原本」

「立香ちゃん!!!」

「まず知り合いって誰!てか、なんで……マギマリの原本まであるの?!」

「気にしちやいけないよ」

「あつ……はい、」

「お?なら、アタシらにもなんかくれよ」

「そうだね、行商代です。どうぞ」

そう言つてギルは小箱を渡した、それと同時に船長が飛び上がる。

「少ないかい?」

「いや……良い!!十分だ!!!」

「ねえ、ギルは何渡したの?」

個人的に気になる、だつて飛び上がる程驚いたんだよ。

「あれはね、胡椒だよ。昔と言っても僕の時代より後だけど、胡椒は金貨よりも高価だったんだ」

「聞いたことある」

「偉い偉い、勉強はしなくちゃ駄目だよ。実地研修はできるんだから、ソロも」

「わあわあわあ!」

「ドクターうるさいよ！」

うん、あれだろうね。ギルはカルデアにいるドクターに簡単な届け物をした。

「これ、携帯かい？」

「プレゼント、後で使いな。ロマニ・アーキマンくん」

気になる会話だけど踏み込んじゃ駄目、それよりも私が欲しい物がある。

「……ギル、アナタの触媒を買いたい」

「非売品です、閉店しますよ？」

ギルの態度が変わる、そんなに嫌か、私のサーヴァントになるのが！

「ギル、嫌なの？私のサーヴァントになるのが」

「嫌じゃないさ、でも、カルデアには神が来るかもしれないでしょ？バーサーカーの僕じゃなくて、ライダーの僕が来てみなよ。まず、僕に令呪はそうそう効かないよ。そんなのが暴れて、大丈夫なの？」

「それなら、バーサーカーのギルが」

「うん、多分無理だよ。僕の予想だけどね、マスターであるエウリユアレは女神だ。つまり、ライダーである僕は女神に使役されるなんて屈辱を理解できないし、矜持しない。だから僕ができたんだと思うよ？記憶も全く同じ、一応僕が最大の力を出せるのはライダーだからライダーである僕に凶化EXを付与できれば良いのだけれど」

ギルは悩んでいるようだ、嬉しいのは私達の事を心配してくれていること。

きよひーも何も言わないからこれは真実だろうし

「よし」

「どうしたの、ギル」

「決めたよ、週4くらいでカルデアお邪魔するよ。そこで店開くから来ると良い。約束ね」

「まっつて場所わかるのかい!？」

「千里眼なめんな! 英霊の座から関係なくお邪魔しよう!」

「なら召喚されてよ!」

「ヤダ! 女神何かと仲良くしたら多分、それ俺じゃない」

「もう……それで、これからどうするの?」

「どうしようか、特に考えてないんだよね。だって俺、別に人間がどうなっても良いし」「は?」

「だからあ……別に君達が人理修復に失敗してもどうでも良いし。何で死んでる奴が生きてるやつのが心配するわけ? 俺はリツカが気に入ったから支援するだけで」

「そうなの?」

「うん、でもまあ召喚は拒否するよ。ライダーの俺が来た瞬間、カルデアで神殺しが始ま

るんだ。そんなのは駄目だ、バーサーカーで宝具もマシなの無いし、ろくにやりあえないけどこうならなきゃ俺は駄目なんだよはリツカ、ごめんね」

「絶対呼ぶ！」

「……知らない、召喚拒否してやる」

何て、馬鹿な話が私とギルでなされる。

「ねえ、ギルガメツシュ。アステリオスの為の」

「そうだね……せつかくだし、禁断の果実でも食べる？」

「何与えてるのよ！」

「いや、多分知能上がるしもつと喋れる様になるぞ？」

「他にないの？」

「あ……目録作んねえと。よし……惑星破壊爆だ」

「しまえ！何処から取り出した！お前は青い狸か！」

「酷いなあ……シヤレのつもりじゃないか、んじやあ……こんなのは。マスター様のアイテム。竜の血、これを一滴でも飲めばサーヴァントは強化されるし、自分も強くなる。副作用は消してあるよ」

「……」

何故か胡散臭い目を向けられる、腹立たしいね。

「こちたら、善意で出してあげてるのに。」

「ほらほら……今だけ無料だよ？」

「……買ったあ！」

「良い買い物だよ、リツカ」

立香は眼の前で瓶の中身を飲み干した。